

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	中根 征也
2. 審査委員	主 査：（兵庫教育大学教授） 石倉健二 副主査：（兵庫教育大学教授） 宇野宏幸 委 員：（岐阜大学教授） 別府 哲 委 員：（兵庫教育大学教授） 井澤信三 委 員：（兵庫教育大学教授） 岡村章司
3. 論文題目： ASD特性のある子どもの運動と感覚特異性についての研究	
4. 審査結果の要旨 論文提出による学位申請者 中根征也 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和8年1月31日（土） 10時00分～11時30分 場所：兵庫教育大学神戸キャンパス連合大学院室 及び Zoomによるハイブリッド 1. 学位論文の構成と概要 本研究は、自閉症（ASD）特性のある幼児児童生徒を対象に、運動と感覚特異性と行動問題の関係についての研究を行った論文である。本論文は全4章で構成されている。 「第1章 問題の所在と本研究の目的」では、特別支援教育におけるASD特性のある幼児児童生徒の状況と、感覚特異性の特徴と支援について概観した。その後、ASD特徴のある子どもの運動特徴と指導・支援について日本国内の状況を、スコーピングレビューを行うことで検討した。その結果、ASD児への運動指導がASD児の運動能力、社会的適応能力を改善させる可能性が示唆されたものの、RCT（ランダム化比較試験）を行った研究は存在せず、指導・支援の効果については限定的であることが示された。 「第2章 ASD特性のある子どものバランス能力と多動・不注意」では、ASD幼児と健常幼児それぞれ10名を対象に、バランス能力と多動・不注意の調査を行った。その結果、健常幼児に比べてASD幼児では片足立ちの時間が有意に短く、また左右差が顕著に大きいことが示された。また、つま先歩きの歩数もASD幼児の方が有意に少ないことが明らかとなった。また、ASD幼児では片足立ちの時間とつま先歩きの歩数が、いずれもADHD-RS（ADHD行動評定尺度）の各スコアとの有意な相関が認められた。このことから、ASD幼児のバランス能力と多動・不注意は相互に関係していることが示唆され、運動介入がASD児の多動性・衝動性に及ぼす効果について検討することの必要性が考察された。 「第3章 特別支援学校に通う児童生徒の特徴」では、知的障害特別支援学校（小・中・高）に在籍する児童生徒70名を対象に、行動問題と感覚特異性、協調運動能力の関係について調査を行った。その	

結果、「低反応・感覚探求」は興奮性、常同行動、多動と関連が強く、「聴覚フィルタリング」は多動、常同運動と関連が強く、「低活動・弱さ」は多動と有意な関係が認められた。また多動傾向の強い児童生徒ほど「両手の協調」に困難が認められ、常同行動と多動傾向の強い児童生徒ほど「視覚と手先の協調運動」に困難が認められ、多動傾向の強い児童生徒ほど「姿勢制御・身体感覚」に関する困難さを示すことが認められた。このことから、特に多動性や常同行動といった行動問題は、感覚特異性や協調運動との関係があり、行動問題に対して感覚 - 運動的介入を行う必要性が示唆された。

最後の第4章では、ASD児や知的障害児の行動問題に対する指導として運動介入が必要であることが考察され、それは特別支援教育における「自立活動」において大きな意義をもつ可能性が指摘された。そしてそのために、理学療法士や作業療法士といったリハビリテーション医療の専門職との連携が不可欠であり、自立活動において教育と医療が交わる新たな支援モデルが提案された。

2. 審査経過

(1) 研究の独創性及び発展性

本研究は、ASD児や知的障害児の行動問題に、協調運動や感覚特異性が関連していることを明らかにした点に大きな独創性がある。これは行動問題のある幼児児童生徒への支援について、感覚 - 運動的介入が効果を有する可能性を示している。これは、発達障害のある幼児児童生徒への支援について大きな発展性を有している。

(2) 学校教育実践への貢献

本研究は、行動問題のある児童生徒に対する「自立活動」において感覚 - 運動的介入を行うことの有用性を示すとともに、リハビリテーション医療の専門職との具体的な連携モデルを提案した。これは、特別支援教育における外部専門職との連携のあり方を示すものであり、学校教育実践への大きな貢献をなすものである。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は中根征也の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。